

アストの群立つところ
 地のもみであつた
 石壁の上に散らかつてゐる
 岩相の友

數一 切水有ハムヒカトハヤニズルカ
數一 切水有ハムヒカトハヤニズルカ

を過つて
陸に散
りて
す
て

黒田三郎日記 戦中篇Ⅲ

一九八一年十一月二十日 初版発行

著者 黒田三郎

発行者 小田久郎

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社思潮社 東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話東京二六七局八一四一番(代) 振替東京八一八一二一番

L393-206005-3016

黒田三郎日記戦中篇Ⅲ

冬二六二に
アストの群をすふところ

そこか
地の果であつた

名にたるる男一

石壁の上に数人の男が立寄り、
其の友

はそこか
地の果であ

つて海に落ち
くらうま

数一ゆれをいふと、
数一ゆれをいふと、
数一ゆれをいふと、

と通つて陸に散りてけと

黒田三郎日記戦中篇Ⅲ

第十六冊

(昭和十六年八月十三日——十六年十一月二十日)

二〇

第十七冊

(昭和十六年十一月二十四日——十七年三月十九日)

二〇八

註

二七四

凡例

一、本文は日記の原ノートを底本とし、原型通りに起こすことを原則とした。
一、表記は新字体・新仮名遣いに統一した。

ただし、次の場合は訂正した。

1 明らかな誤字・脱字。

2 踊り字（〜）。

3 漢字表記で読みにくいものは送り仮名・ルビをおぎなった。

例 不拘↓拘らず 徒に↓徒らに

4 編集部で人名等、適宜おぎなったものは（ ）内8ポイント活字で明示した。

次の場合は原文のままとした。

1 外来語・外国人名の表記

2 送り仮名

3 著者特有の表記

一、書名、雑誌名はすべて「」で統一した。

一、本文、註は光子未亡人による校閲をへた。

一、以上の他、日記の原文章に改変を加えていない。

題字·青山杉雨

黒田三郎日記〔戦中篇〕Ⅲ

八月十三日 水 曇り

朝早く起きて、「シラノ・ド・ベルジュラク」をよむ。近海に颱風あり。シラノは二度よむ本じゃない。いっぺんで十分だ。

上荒田本通の小さな古本屋の中にと、雨がふってきた。「エッセーニン詩集」一冊を買うだけにかえろう、と思っていたのに、ヴィクトル・ユゴオ「海の労働者」上・下、グラツィア・デレッタ「正直な心」柳田泉「希臘思想の研究」と四冊もふえてしまう。濡れてかえる。濡れた髪の毛が眼の上に垂れてくる。

間もなく晴れる。風が吹きはじめた。

母は指宿へおでかけだ。眠っていると野崎さん⁽²⁾が見える。

一番星が光る頃すっかり雨戸をしめてしまった家の中から春子と二人そっとぬけ出る。新照院のお墓に詣る。花屋は戸を閉めている。真暗な坂を降りて電車通り迄花を買いに行った。

花をすっかり供えてしまったあとぼんやりして立っていると、無数の星が頭上に出ている。

新上橋の古本屋で「世界美術全集」第三巻、コーガン教授「プロレタリア文学論」を買った。かえりに、修繕の出来た靴をとりにつく。

セルゲイ・エッセーニンの詩はそうたいしたものではない、と思う。だがここにロシアの農民のにおいがしているというだけで僕には十分だ。

風が激しくなりそうなので、雨戸をすっかりしめた上にガラス戸さえみんな掛金をかけてしまった。広々とした部屋の中にひとりいる。

とり立てていうほどの原因はない。軽い意味でなら湖水をめぐる自転車のような情欲から、と云っている。ひとりの女のことをときたま考える。香水売場に立っている〇（一字不明）り勝なひとりの女のことを。僕は不器用でおかしい位だ。自分を見ている自分がどんなかおをしているか、いつもオドオドして気を配ってばかりいる。女に対してというよりも自分に対してひどく臆病である。それは実際には、女に対して、という事になる。僕には書物の森の中で暮すより外には、何の取柄もないのか。だけど、僕はそれでけっこうと思っている。そしておまけにブツクサ云うのである。僕には書物の森の中で暮すより外には何の取柄もないのか、と。

八月十四日

僕は不満々だ。たれひとり自分の真価を認めてくれない、と思っているのである。そのくせ、人の評判なんか一寸だって気にしない、というかおをしている。そして人の評判なんか一寸だって気にしまい、と考えているのである。

僕はこういう喰い違いを自嘲するために挙げたのではない。というのは何だか、この喰い違いに一寸も悲しみなんて感じないからだ。そしてただ、たとえば急行列車を通りすぎたあとぼんやりして何となく、何か不思議なものがある、とでもいうような気持になる、あんな気持を感じているだけである。砂の上にねころんでおあおとした夏の空に白い雲が浮んでいるのを眺めながら、俗物奴！と

ひとことつぶやき、それからカラカラと笑い出す一瞬に似ている。

折角戸締りをよくしてねたのに風は吹かなかった。あけるのに苦労していると古い日の屈辱を思い出す。Bera Bome Bah Kkatz などつぶやいている中に、それでもみんなあけてしまう。

朝からお風呂をわかしてはいる。

おひるからまた家をモヌケのカラにして、でかける。はかまをつけ、角帽をかぶり。

浄光明寺の高台から見下すと航空母艦が二隻はいっている。曇った空を編隊で飛行機がとぶ。

お墓の前でたからかに手を打ちならす習慣はいい、と思う。何からこんな真似がでて来たのだろうか。手を叩いたんに、ウツロな頭蓋骨の中で清々しい音がするような気がする。丹田に力がいるのである。

寝椅子の上でルナル「明るい眼」をよんだ。

夕暮れは気味悪いほど空が黄色くなる。眼をひらいていられないような気がするほどである。壁が蒼ざめる。

外燈が薄青くたより無げに見える。

春子と騎射場まで歩いた。かえるとまもなく真暗になる。

そしてしばらくすると、雨の音がしはじめた。

半分位よみ残していた三枝博音「技術の思想」をよみおえる。

八月十五日 金

颱風は外れてしまったらしい。少女のように照って秋がきている。太陽がやってくる、木の影にすばやく身をかくしてしまう。

八月十六日 土

意味なんてありゃしない。電車の中に似たようなおが並んでいる。話をしている。ききょうが咲いている。パンを喰う、意味なんてありゃしないんだ。

その中に意味を見つけるのが文学の仕事だ。人間の生活だ。だがそれなのに一体僕は何なのか。小説ばかりよんでいて、何にでもかんにでも意味がある、と思っているのである。味もそっけもない無意味なことばかり。ねいすの上でくたびれ切つてると、吉峯（親戚）がくる。さんべん碁をうってさんべん敗ける。それも七目置かして貰ってである。

お母さんと健（弟）がかえってくる。

昨日から家にとじ籠っていて、そのくせ、本もよまなければひるねもしない。

今朝は三軒のデパートを歩いてきた。九谷焼の小さな湯呑をひとつ買う。

八月十七日 日

昨日も今日もしずかない日だ。梢の木の葉がゆらゆらゆれているばかり、そして影がゆらゆらゆれているばかり、雀がとんで行った。

昨夜は健の寝息が耳についてねむれなかった。

経験しないことをかける筈がない。夢みない者に夢がかけやしないのである。しかしひとは眼を持
っている。耳を持っている。本をよみ、はなしをきくのである。

自ら経験したことで他人の経験を眼や耳で伝えられたことが絡み合つて無数の黒い蛇のように無
意識の黒い海から鎌首をもたげる。

ああ、それにしても自ら経験した者によつてのみ、その経験は生き生きと伝えられるだろう。

ひとは自分と関係のないことには耳を傾けないだろう。よほど暇でないかぎり耳を傾けないであろ
う。そして一生に於ける暇とは何か。文学はかような暇の上に立っているとも云える。だがそれだけ
ではない。一体自分と関係のあることというのはどんなことなのだろう。無数のひとびとは僅かに手
から口へというだけのことで生きている。そして短い触角のえがく円が螢の光のようにほの青いだけ
である、だろう。そしてひとが自分に関係がある、と思つていることだけが彼の関係のあることのす
べてであらうか。

文学の役目はひとに未知の領域をひらいて見せることである。彼の経験しない世界を文学の上で、
というよりも思考の上で経験させる。そしてひとが自分と関係のない世界として耳を傾けようとし
ない世界に、ひきずりこむ。暴力で、甘言で、美酒で、愛情で。

そんなことを思つていちんち退屈していた。珍しくひるねする。寝椅子の上で昨日は“Ladybird”
に不思議な美しさを感じたけれど、今日は“A Chapel Among the Mountains” “A Hay Hut A-
mong the Mountains” “England, my England” “The Man who loved Island” 等々など、そ
う一度 D・H・ロレンスのものをよんでみようと思ひ立った。これらのものは、四、五年前によんだ